

タイトル：平成 30（2018）年度 教育セミナー（第 14 回）

日時：2018 年 9 月 13 日（木）～16 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「中東・イスラーム研究とジェンダー学と人類学——学際的研究のあり方を問う」

嶺崎 寛子（愛知教育大学）

本報告では、学際的な研究を自分でデザインし、自分で自分を伸ばしていくためにはどう  
いう視点を持てばいいか、学際的な研究のメリット（うまくいけば二つ以上の学問分野で認  
められる）とデメリット（二つの学問分野について勉強する必要があるため時間がかかる）  
などについて述べ、二つの系の異なる練習問題を出し、受講生参加型の報告を目指した。

私個人は今の研究の大事な基盤となった大学院博士後期課程時代、自分とは専門の異な  
るイスラーム都市社会史の先生のゼミで育ててもらい、ゼミでは自分の研究とは全く関係  
のない年代記や歴史書を読んでいた。ジェンダー学や文化人類学等は副指導教官のゼミで  
学びつつ、合計で 4 年 10 ヶ月（修士時代も含む）、フィールドに滞在した。指導教官は折々  
にカイロまで生存確認に来てくれたが、手取り足取り教わった覚えはなく、複数のゼミを学  
問的な足場にしながら、「複数の良質な水場を持ち、豊かな牧草地（フィールド）で好きな  
だけ良い草を食べる」という幸せな羊のような院生時代を送った。この学際的な経験を一般  
化すると、表現が偉そうになってしまうが、「指導教官や所属先の大学院（とそのシステム）  
に頼るだけではなく、能動的に機会を掴み、学問的な好奇心に基づいて率直に行動し、自  
分の研究を自分でデザインせよ」ということになる。

ジェンダーを専門とする参加者は多くなかったため、既存の学問区分に対するアンチテ  
ーゼから出発したジェンダー学という新興学問分野から眺める経験を通じて、異なる角度  
や学問分野から事象を眺めることのメリットを伝えることを第一義に考えた。また、中東地  
域におけるジェンダー研究の重要性についても述べたかったが、これについては十分にセ  
ミナーの中で議論を尽くせたとは言えず、やや反省が残る。

練習問題として、クイズ形式の軽いものと、論文のネタをどう料理すべきかという論文作  
成にあたっての理論的枠組みの作り方の二つを設定した。クイズ形式では、発展途上国の女  
性たちの生活向上をめざすポスターや、日本と他国の同じ映画のポスターの表象のされ方  
の違いなどを具体例とし、どのようなバイアスがみられるかを受講生に答えて貰った。論文  
作成については、2018 年秋刊行予定の拙稿「ローカルをグローバルに生きる—アフマディ  
ーヤ・ムスリムの結婚と国際移動」『社会人類学年報 44 号』弘文堂を事例として、アフマ  
ディーヤという少数派のムスリムの人々の間で、先進国に移住した移民二世の国際移動、特  
に結婚をめぐる国際移動に顕著なジェンダー差がみられることを説明した上で、これを論  
文としてどのように料理すればいいかについて、ディスカッションを行った。

そもそもの専門であるエジプトのジェンダー問題や、採取してきたファトワの具体例  
などに触れる時間が足りなかったことは惜しいが、受講生が積極的に発言してくれたおかげ  
で、実り多い意見交換が出来たのではないかと思う。